
川端康成「禽獣」の文体

「彼」という空白を中心に

HIRAI Yuka

平井 裕香

1. 空白と「彼」

川端康成の「禽獣」(『改造』1933年7月)⁽¹⁾は、「小鳥の鳴声に、彼の白日夢は破れた」(157)という一文で始まる。この「白日夢」の内容は、作品の末尾近くでようやく次のように明かされる。

彼女は彼に背を向けて寝ると、無心に目を閉ぢ、少し首を伸ばした。それから合掌した。彼は稲妻のやうに、虚無のありがたさに打たれた。

「ああ、死ぬんぢやない。」

彼は勿論、殺す気も死ぬ気もなかつた。千花子は本気であつたか、戯れ心であつたかは分らぬ。そのどちらでもないやうな顔をしてゐた。真夏の午後であつた。

しかし彼はなにかひどく驚いて、それから後は自殺を夢にも思はず、また口にもしなくなつた。たとひどのやうなことがあらうと、この女をありがたく思ひつづけねばならないと、その時心の底に響いたのだつた。

踊の化粧を若い男にさせてゐる千花子が、彼女のその昔の合掌の顔を、彼に思ひ出させたのである。さつきも、自動車に乗ると直ぐ浮んだ白日夢は、これであつた。たとひ夜でもあの千花子を思ひ出す度に、真夏の白日の眩しさにつつまれてゐるやうな錯覚を感じるのだつた。(179-80)

「彼〔が〕十年近く前、千花子と心中しようとした」時のことである。「彼」が「白日夢」に見ていたのも「これ」すなわち「彼女のその昔の合掌の顔」だった。そしてそれを見ていた時点が「さつき」と書かれることにより、「さつき」から〈今〉⁽²⁾に至るまで、つまり「自動車に乗ると直ぐ」から「千花子」の楽屋を訪れるまでが、一条の時間経過として物語を枠づける。ところがこの経過の起点は、冒頭においても以下の通りほのめかされていたのだつた。

芝居の舞台で見る、重罪人を運ぶための唐丸籠、あれの二三倍も大きい鳥籠が、もう老朽のトラックに乗つてゐた。

葬ひの自動車の列の間へ、いつのまにか彼のタクシイは乗り入つてゐたらしい。うしろの自動車は、運転手の顔の前のガラスに「二十三」といふ番号札を貼り付けてゐた。

(1) 本文からの引用は、頁数を含め『川端康成全集 第五巻』(新潮社、1980年)に依拠した。□ 内の改変と注記、省略および傍点による強調は全て引用者による。

(2) 小説の言葉との関連で読み手の意識に浮ぶ言葉を、本稿は〈〉で表記する。

道端を振り向くと、そこは「史蹟太宰春台墓」との石標が表にある、禅寺の前であつた。その寺の門にも貼紙が出てゐた。

「山門不幸、津送執行」

坂の途中であつた。坂の下は交通巡査の立つてゐる十字路であつた。そこへ一時に三十台ばかりの自動車が押し寄せたので、なかなか整理がつかず、放鳥の籠を眺めながら、彼はいらいらして来た。花籠を大事さうに抱いて、彼の横にかしこまつてゐる小女に、

「もう幾時かね。」

しかし、小さい女中が時計を持つてゐるわけはなかつた。(157)

「もう」と「いつのまにか」はそれぞれ、「鳥籠が」「トラックに乗」る前と「葬ひの自動車の列の間へ」「彼のタクシイ〔が〕乗り入」る前、つまり「白日夢〔が〕破れ」る前を読み手に意識させずにおかない。物語の出発点、「白日夢」にまどろむ「彼」は、地の文にはるかに先んじて読み手によって描かれていた。「白日夢」の内容をあえて空白に留めることは、このように読み手を小説に呼び込む戦略と考えられる。

思えば冒頭はいくつもの空白を読み手に差し出している。引用最終文の「しかし」が、「小さい女中が時計を持つてゐるわけはなかつた」を接続するはずの文が、ここにはまずもって欠けている。にもかかわらず違和感なく、あるいは抱いた違和感を棚上げして読めるとしたら、「もう幾時かね」が「彼」の問いだと読み手が推測しているからだ。「しかし」という逆接についてゆくと、〈と彼は尋ねた〉等を読み手は補わなければならない。逆に言えば「しかし」によって、読み手は「女中」に尋ねる「彼」を想像するよう仕向けられる。同じことが「うしろの自動車」や「道端を振り向くと」にも言える。〈彼の〉「うしろの自動車」や〈彼が〉「道端を振り向くと」と読み手が空白を埋める過程で、知覚し行為する「彼」が言説の背後に作られてゆく。他方でこうした空白は、地の文の叙述そのものを「彼」の言葉と錯覚させる。「もう幾時かね」という発言と「しかし」以降の地の文の無媒介な連続は、前者の言表行為の主体すなわち作中人物「彼」と、後者の言表行為の主体すなわち彼を「彼」と呼ぶ書き手の差異を掻き消して、あたかも「彼」の思考のように後者を読むことを促す。もしも〈と彼は尋ねた〉等があれば、「しかし」以下はより「彼」でない書き手の判断らしくなるだろう。「うしろの自動車」と「道端を振り向くと」も同様に、それらを含む地の文を「彼」の認識のように読ませる。

「禽獣」が「彼」の連想か回想の流れとみなされてきた⁽³⁾のも、読み手が地の文の空白を満たしているからにはかならない。

佐伯彰一はこの冒頭の効果を「読者に「彼」との同一化を性急にもと」めること、「読者が「彼」の眼を通して見ることを学び始めること」と論じた⁽⁴⁾。これを精緻化する形で、塩崎文雄は「もう」が「彼」との時間意識の共有を読み手に迫ると指摘した⁽⁵⁾。しかし代名詞の用法を逸れ、既知の誰をも指さない「彼」が、共有される時間意識や同一化する先の実体を、まして世界を分節する眼（視覚）を予め備えているはずはない。地の文がことさらに提示する空白にそれを充てがう時、読み手がいつしか充填している空白こそが「彼」なのである。「禽獣」がこうした極めて特殊な「彼」を設けることにより、読み手にどのような解釈を行わせてゆくのか、本稿において明らかにしたい。

2. 「今【で】はもう」と「のである」

「禽獣」に生起する時間の質が「彼」の位相にかかわることは、新城郁夫がいみじくも分析した通りだろう⁽⁶⁾。但しそれは新城の言う「現在の時点」の失効ではなく、むしろ現在の広がりの特徴づけられると思われる。

千花子の踊を見に行くのに、そんなことを気にするのからして、今はもうをかしいはずであつた。縁起が悪いと言へば、道で葬式に会ふことよりも、彼の家に動物の死骸を置きっぱなしにしてある方が、縁起が悪いはずであつた。

「帰つたらこんやこそ忘れんやうに、菊戴を捨ててくれ。まだ二階の押入にあのままだらう。」と、彼は吐き出すやうに小女に言つた。

菊戴の番が死んでから、もう一週間も経つ。彼は死骸を籠から出すのも面倒臭く、押入へはふりこんだままなのである。梯子段を登つて、突きあたりの押入である。客のある度に、その鳥籠の下座蒲団を出し入れしながら、彼も女中も捨てることを怠つてゐるほど、もう小鳥の死骸にもなれてしまつたのである。(158-59)

作品冒頭に程近い、「彼」と「タクシイ」の「運転手」との会話に続く場面である。第一文の

(3) 須藤宏明「『禽獣』研究史」須藤宏明、高根沢紀 子[編]『川端康成作品論集成第三巻 禽獣・抒情歌』おうふう、2010年。

(4) 「『禽獣』・『雪国』」『解釈と鑑賞』1957年2月。

(5) 「『禽獣』私注——あるいは、「もう」の修辞学について」『近代文学試論』1983年12月。

(6) 「川端康成『禽獣』における時間の生成」『立教大学日本文学』1992年12月。

「もう」は読み手に、「千花子の踊を見に行くのに、そんなことを気にするの」が「をかし」いどころか当然だった〈かつて〉を思い描かせる。「そんなこと」の指示対象も、直前の会話の内容とそれを受けた第二文から、「道で葬式に会ふこと」の縁起の悪さとわかるだろう。こうして読み手は〈かつて〉より後、「彼」の「千花子」との関係が何らかに変化した後の幅を持った時間として、「今」を理解するようになる。言い換えるなら「もう」が「今」に持続を内包させているのだ。

次の場面が「彼」の造型、ひいては作品全体の核心として引かれてきたのも、それが持続する現在に「彼」の屈折を幾重にも織り込んでいるからではないか。

彼はどんな愛玩動物でも見ればほしくなる性質だが、さういふ浮気心は結局薄情に等しいことを経験で知り、また自分の生活の気持の墮落が結果に来ると考へて、今ではもう、どんな名犬でも名鳥でも、他人の手で大人となつたものは、たとひ貰つてくれと頼まれたにしろ、飼はうとは思はぬのである。

だから人間はいやなんだと、孤独な彼は勝手な考へをする。夫婦となり、親子兄弟となれば、つまらん相手でも、さうたやすく絆は断ち難く、あきらめて共に暮さねばならない。おまけに人それぞれの我といふやつを持つてゐる。

それよりも、動物の生命や生態をおもちやにして、一つの理想の鋳型を目標と定め、人工的に、畸形的に育ててゐる方が、悲しい純潔であり、神のやうな爽やかさがあると
思ふのだ。良種へ良種へと狂奔する、動物虐待的な愛護者達を、彼はこの天地の、また人間の悲劇的な象徴として、冷笑を浴びせながら許してゐる。(164)

第二段落は「だから」によって第一文に繋がれており、第三段落は「それよりも」で第二段落に結ばれている。またこれら二つの段落内で、第一文と第二文以降は内容上ほぼ一致している。ゆえに読み手は引用を一連なりの「彼」の考へ、「どんな名犬でも名鳥でも、他人の手で大人となつたものは、たとひ貰つてくれと頼まれたにしろ、飼はうとは思は」なくなつて以降の「彼」の思想として受け取つてゆく。他方で「だから」と「それよりも」は、それぞれが果たす論理的機能をすっかり停止させられている。「どんな名犬でも名鳥でも […] 飼はうとは思はぬ」という考へと「人間はいやなんだ」という考へに因果関係は想定できず、「[人間が]

人それぞれの我といふやつを持つてゐる」ことと「動物の生命や生態を […] 爽やかさがある」ことも直に比べることはできない。前節で見た「しかし」と同じく接続先を欠くとも言えるが、ここで補うべき表現は明らかから程遠く、「彼」をその空白に充てるべきことのみが読み手に承知されている。読み手は「彼」にあるらしい論理をひたすら探求するか、地の文にある非論理を「彼」という人物のそれとして飲み込まざるを得ないだろう⁽⁷⁾。

こうして「彼」の[非]論理を組み立てるよう強いられることは、〈と彼は尋ねた〉等を補われる場合にも増して、それを取り次いでくれる書き手の不在を読み手に印象づける。あたかも「彼」の肉声のように地の文を読ませる効果はまた、「のである」および「のだ」という、話者の説明や判断を表す文末語によっても生じている。それらは地の文の書き手と読み手に共有されている現在時を強調するが、「禽獣」における現在時すなわち「今」と呼ばれる時間は、「彼」との関係でその幅を決定されるものとしてある。なぜなら「もう」が表す変化は「彼」の変化だからである。「今」が内包する持続はすなわち「彼」の持続でもある。したがって地の文が何らかの方法で現在を示す時、読み手は「彼」をその話者として思い描くことになる。「どんな名犬でも名鳥でも […] 飼はうとは思はぬのである」が文頭での「彼は」という対象化にかかわらず、また「それよりも、動物の生命や […] 爽やかさがあると思ふのだ」が「悲しい純潔」、「神のやうな爽やかさ」という凝った逆説を弄しているのに、「今」の「彼」自身による述懐のように読めるのは、このためだと思われる。さらに第二段落の「つまらん」および「といふやつ」は、「彼」でない書き手の存在感が稀薄なこの箇所でのみ、地の文として書かれ得た口語表現と言えらう。

ではこの「今」はどれだけの持続をはらむものとして、読み手に理解されてゆくのか。

このポストン・テリアのやうに、千花子は子供に無心ではゐられなかつたのである。

犬の子にしても、彼が助けようと思へば、助けられたのである。第一の死の後に、藁をもつと細かく刻んでやるか、藁の上に布を敷くかしてやれば、それで後の死は救へたのである。それは彼に分つてゐた。しかし、最後に残つた一頭も、やがて三人のきやうだいと同じ死に方をした。彼は子犬が死ねばいいと思つたわけではなかつた。だが、生

(7) 上田渡の述べる通り、この箇所は「彼」の真実という元来あるはずのないものを読み手に欲望させてきた（『川端康成『禽獣』論——語りの虚構性を超えて』『川端文学への視界17』銀の鈴社、2002年）。その傾向の特に顕著な三好行雄（『虚無の美学——『禽獣』』『作品論の試み』至文堂、1967年）や川嶋至（『ひとつの断層——みち子像の変貌と『禽獣』の周辺』『川端康成の世界』講

談社、1969年）が、作中人物「彼」と作者を同一視していることは、川端康成を地の文の書き手の水準に押し込めて、地の文とその他の関係を検討の埒外にしてきたという研究史の問題点を示唆する。

かさねばならないとも思はなかつた。それほど冷淡であつたのは、彼等が雑種だからであらう。

路傍の犬が彼について来ることは度々あつた。彼は遠い道をそれらの犬と話しながら家に帰り、食物をやり、温かい寝床に泊めてやつたものであつた。犬には彼の心のやさしさが分るのだと、ありがたかつた。けれども、自分の犬を飼ふやうになつてからは、道の雑犬など見向きもしなくなつた。人間についても、またかくの如くであらうと、彼は世のなかの家族達をさげすみながら、自らの孤独も嘲るのである。

雲雀の子も同じだつた。生かして育てようとの仏心は直ぐ消えて、屑鳥など拾つてもしかたがないと、子供達のなぶり殺しにまかせておいたのである。(171)

第四段落冒頭は「雲雀の子も同じだつた」と、「彼」の「雲雀の子」への態度と「道の雑犬」へのそれに共通性を示唆している⁽⁸⁾。また同段落で語られる「屑鳥など拾つてもしかたがないと、子供達のなぶり殺しにまかせ」たという行いは、「雑種だから」という理由で「犬〔=ポストン・テリア〕の子」を助けなかったという、第二段落で語られる「彼」の行いに重なっている。つまりこの引用は、「彼」の「犬の子」、「雲雀の子」、「道の雑犬」とのかかわりに、ある繋がりを見出すことを読み手に促している。他方でこの引用は、劣ったものへの「冷淡」と冷笑的な「孤独」という、「彼」を性格づけるに足る形容句を用意している。指示された繋がりの実に読み手がそれらを充てる時、繋がりには前の引用に言う「動物虐待的な愛護者達」を容認する姿勢に加え、人間同士の親愛を否定する「孤独」へ通じてゆく。引き伸ばされた繋がりには、「どんな名犬でも […] 飼はうとは思はぬ」という考えが、遅くとも「自分の犬を飼ふやうになつて」以降を覆っていたことを読み手に推測させるだろう。

ところで小説のここまでする「彼」の動物愛玩のうち、(1)ポストン・テリアの出産(2)より前の「初冬」、166-67と168-69)、(2)ドオベルマンの出産(「去年の十一月」、165-66)、(3)菊戴の到着から雌の死後しばらく(「楠の葉」に「朝の霜」がおく少なくとも一ヶ月前から(4)まで、159-63)、(4)雲雀の子の遺棄(「藤の花」が散る五月頃、163-64)のみ、この順番で起こったことが知られるように書かれていた。引用からの推測にこの順を考え合わせることで、(1)以前から(4)までを包摂する持続として読み手は「今」を理解する。逆に言えばこうした理解を可能にする限りにおいて、一見するとばらばらな挿話は緩やかに結ばれている。

(8)馬場重行は助詞「も」が読み手を語りの現在時へ連れ戻すと考察するが(「川端康成『禽獣』試論—〈夢〉の破れ」『文学』1989年12月)、その現在がはらむ持続が一つには「も」で作られている。

「今」をこのように理解した読み手にとって引用は、「彼」の動物愛玩と「千花子」との関係がかかわるという暗示を帯びることになる。「このボストン・テリアのやうに […] 無心ではゐられなかつたのである」は、判断がなされる現在時を「この」という指示の基点として二重に前景化している。そのため読み手はこの一文を、「今」の「彼」の感懐と読む。だとすればその「今」の「彼」から、「ボストン・テリア」は心理的に近く、相対的に「千花子」は遠い。さらに「のである」の反復は、それで終わる全ての文が同一の時間枠からの、同一の主体の判断である手触りを読み手に与えるだろう。すなわち「道の雑犬」、「犬の子」、「雲雀の子」への「彼」の態度に「冷淡」や「孤独」を見て取るのは、「ボストン・テリア」をより近く、「千花子」をより遠く感じる「今」の「彼」だと考えられる。この印象を補強するのが第三段落最終文だ。「人間についても、またかくの如くであらう」という「彼」の嘲弄は、「自分の犬を飼ふやうになつて」「道の雑犬など見向きもしなくなつた」出来事を参照すると同時に、「 […] と […] 嘲るのである」という判断と時を同じくしている。(1)以前から(4)までを包摂する「今」でなければ、このような言表はあり得ない。以上から読み手が思いなすのは、「今」が「千花子」をその外＝〈かつて〉に追いやって成立していること、「どんな名犬でも名鳥でも […] 飼はうとは思は」なくなった変化が、「千花子の踊を見に行くのに […] 気にするの」が「をかし」になったのと同じく、「彼」の「千花子」との関係に密接にかかわることである。

3. 愛玩と結婚

「彼」の動物愛玩と「千花子」との関係のかかわりを探ろうとする読み手にとって、前節の整理の(3)の途中、唐突に挿入される会話は重要な手がかりとなる。

「結婚したらいいぢやないか。」

「それもね、薄情さうに見える女の方がいいんだから、だめだよ。こいつは薄情だと思ひながら、知らん顔でつきあつてるのが、結局一番楽だね。女中もなるべく薄情さうなのを雇ふことにしてゐる。」

「さういふんだから、動物を飼ふんだらう。」

「動物はなかなか薄情ぢやない。——自分の傍にいつも、なにか生きて動いてるものがゐてくれないと、寂しくてやりきれんからさ。」(160)

結婚を勧める「客」の言葉に「彼」は否定で答えつつ、話題を「女中」の雇用に逸らす。「さういふんだから、動物を飼ふんだらう」という「客」の応答にはしかし、〈結婚せずに〉のニュアンスが誤解の余地なく含まれている。「彼」がこの言い当てを否定しようとしなないことは、「彼」の動物愛玩が結婚の代替であることを匂わす。ゆえにまた「どんな名犬でも […] 飼はうとは思は」ないことは、〈どんな優れた女でも、他人の手で大人となつたものは、たとひ貰つてくれと頼まれたにしろ、結婚しようとは思は〉ないことの裏返しではないのかと、読み手は想像せずにおけない。そもそも「彼」の結婚[の忌避]が「禽獣」の主題であることは、「彼」の造型を通して繰り返しほめかされている。「彼」について最初から読み手が知っている唯一のことは彼が男性であること、加えて空白の「彼」に付く僅かな形容のいくつかは、「四十近い独身者の彼」(159)、「家族なく暮してゐる彼」(163)と結婚[の忌避]に関連している。

「十年も前」、「彼」が「千花子」を買った時彼女と交わしたらしい会話(167-68)も、後半の話題は結婚である。

「お嫁入りする時、分るわね。」

「分るね。」

「どんな風にすればいいの。」

「君はどうだつたんだ。」

「あなたの奥さんは、どんな風だつたの。」

「さあ。」

「ねえ教えといてよ。」

「女房なんか無いよ。」と、彼は不思議さうに、彼女の生真面目な顔を見つめたものだつた。
(168)

「お嫁入りする時、分るわね」という「千花子」の短い台詞から、読み手は売春の経験が結婚の際に知られること、おそらくまた差し障ることへの彼女の懸念を感じ取る。「こんな商売をしてる」自分に結婚は無理だという意識も働いていたかもしれない。「私あなたはずるぶん好きなの」と「彼」への好意を表明し、「あなたの奥さん」についてしつこく尋ねる「千花子」

の様子は、「彼」との結婚が可能かどうか窺っているとも考えられるし、初夜の妻を模すことで擬似的に「彼」と結婚したいと願っているとも考えられる。いずれにしても彼女の想いは、「女房なんかないよ」という「彼」のにべない返答で粉々に砕かれてしまっただろう。それは「千花子」との結婚が法的には可能であること、しかしそのような気は全くないことを露骨に示す。

「不思議さうに」が当時の「彼」への客観的な描写だとしたら、この「彼」は「千花子」の心情をいかようにも理解していない。しかし「彼」が判断の対象となることのイレギュラーさは、それを無理解の装いと疑うことを許容する。少なくとも「ものだつた」が表す回想の主体とみなされる「彼」は、回想の引き金となった「ボストン・テリア」に対してと同じく、「千花子」にも「道徳的な苛責に似たものを感じ」ているらしく見える。「彼」が引用のすぐ後で「あれと似てゐるので、気が咎めたのだ。」と「犬を抱き上げて、産箱に移してや」ることも、こうした読みを支えるだろう。したがって読み手が聴き取った「千花子」のあらゆる感情は、「今」の「彼」が聴くものとして、「彼」の疚しさに根拠を与える。同時に「どんな名犬でも […] 飼はうとは思は」ないことが、「千花子」と結婚しなかったことの反復と解釈されるようになる。初夜について尋ねる彼女に「君はどうだつたんだ」と問い返す「彼」は、とにかく「千花子」の初夜を知らない。つまり彼女は処女でない点で、「彼」にとって〈他人の手で大人となつた女〉だった。

「彼」が「ボストン・テリア」から「千花子」を思い出すことは、十九歳から「第四回の舞踊会」までの彼女の描写（169-71）を、「彼」に飼われた犬の描写に重ねて読むことを促す。なぜならそれらはともに生殖（出産）にかかわるからである。

「育てる気か。そんな女々しいことで、一芸に生きられるか。今から子持ちでどうする。もつと早くに気をつけろ。」

「だつて、どうしやうもなかつたんですもの。」

「馬鹿なことを言へ。女の芸人がいちいち真正直に、なにをしておいてたまるか。亭主はどういふ考へだ。」

「喜んで可愛がつてますわ。」

「ふん。」

「昔あんなことしてた私にも、子供が出来るつて、うれしいわ。」

「踊なんか止したらいいだらう。」

「いやよ。」と、思ひがけなく激しい声なので、彼は黙ってしまった。(170)

「踊衣裳のまま化粧を落してゐる」「千花子」を「彼」が連れ出せること、「芸」を主な理由にして彼女の出産を責めること、もしかすると「彼」が「犬」を所有し、売買し、見せ物にする(165-66)ことから、「彼」が「千花子」という「芸人」と金銭で結びついていたこと、おそらく彼女のパトロンだったことを読み手は推測する。「或る音楽雑誌に月々金を出」していた「彼」ならそれも難しくなかったはずだ。「踊なんか止したらいいだらう」と言う時、「彼」は何を意図していたのか。経済的援助は続けてやるから子育てに専念しろという意味だったのか、どうか。いずれにしても、「いやよ」という「千花子」の拒絶に「彼」は黙り込んでしまった。そして大方、パトロンとしての援助も断った。「第四回の舞踊会」以後の彼女の「夫婦生活」を「彼」は「噂」に聞くだけである。ゆえにまた、「千花子の踊を見に行くのに、そんなこと〔＝縁起の良し悪し〕を気にするのからして、今はもうをかしいはず」なのである。

「犬の子にしても、彼が助けようと思へば、助けられたのである」という文は、「千花子の子供」も、「彼が助けようと思へば、助けられた」こと、「彼」というパトロンの喪失が、彼女が再び出産する、また産んだ子供を育てるのさえ不可能にしたことを示唆する。なぜ助けなかったのか、なぜもっと熱心に説得したり援助を続けたりしなかったのか。「犬の子」が「雑種」だったようにその子も「良種」ではなかったから、「満州から同行の伴奏弾き」の怪しい種だったからだろう。そもそも「千花子」自身の出自が「ボストン・テリア」と同じく怪しい(166)。こうして「彼」の「雑種」および「屑鳥」への冷淡が、「千花子」の子供への冷淡の反復と読まれるようになる。「あれと似てゐるので」という「彼」の曖昧な内言は、分婉しようとする犬に「彼」が感じる「気〔の〕咎め」を、読み手が「千花子」とその子供に敷衍することを妨げない。その時読み手が描くのは、彼女の子供を見殺しにしたかつての自分の選択を、動物の子供も見捨ててことで繰り返している「彼」である。

「あれ」に伴う曖昧さはまた、「彼」が「思ひ出」す「十年も前の千花子」に、読み手が後に遡及して心中未遂の時の彼女を含めることを可能にする。「彼」の想起のきっかけとなる「この犬のやうな顔」すなわち「大変あどけなく人まかせで、自分のしてゐることに、なんの責任も感じてゐないらしい」顔は、「彼」が「女房なんかないよ」と言いながら見つめた「生真面

目な顔」と見逃し難くずれていた。宙吊りになったこの顔を、「十年近く前」、「彼」の「死の相手」になることに「たわいなくうなづ」いた時の「千花子」の「自分のしてゐることの意味を知らぬ例の顔つき」(179)は、読み手に喚起するだろう。「彼女のその昔の合掌の顔」が冒頭の「白日夢」の内容だったと、小説の末尾近くにおいて明かされることを先に述べたが、「さつきも」、「あの千花子を思ひ出す度に」と、それがほとんど絶え間なく呼び起こされていたことも同時に明らかにされている。だとすれば「大変あどけなく […] 感じてゐないらしい」顔から、「彼」が彼女との心中未遂を思い出さない方がおかしい。つまりこの「あれ」の中には、心中未遂の時の「千花子」が常に既に潜んでいるのだ。

思えば心中未遂自体も、同じく曖昧に描かれている。「彼」が「白日夢」に見ていたものが「これ [=彼女のその昔の合掌の顔]」に特定される一方、「彼」が度々「思ひ出す」ものは「あの千花子」、すなわち「合掌の顔」だけでなく彼女の他の仕草や発言、ひいてはそれまで読まれてきたあらゆる「千花子」に開かれている。逆に言えば、「合掌の顔」以外の要素は「あの」に緩く包まれるばかりで、「彼」がそれそのものを「思ひ出」したとは限らない。「彼」は「千花子」との心中未遂、その全体には最後まで向き合い切れていないのである。だからこそそれは「あれ」「あの」を介して「彼」に回帰し続ける——それを想起し続ける「彼」が読み手によって描かれる。「彼に自分を売る時」の「千花子」も、「第四回の舞踊会」の彼女も、「彼」に「真夏の白日の眩しさにつつまれてゐるやうな錯覚を感じ」させたかもしれない。「あどけなく人まかせ」な「ボストン・テリア」も、「子供を殺したの知らぬ顔に、嬉々と駆け回る」(169)それも、彼女との心中未遂の記憶を「彼」に喚起したかもしれない。いつそ全ての動物との間で「彼」は心中をやり直していたと考えることすらできるだろう⁽⁹⁾。「さつきも」という表現は「さつき」と〈今〉がともに一つの、心中未遂以降という持続に含まれていることを示す。(1)以前から(4)までを覆う「今」をこの持続とみなす時、読み手は結婚-愛玩と心中を半ば同一視して、「動物〔が〕なかなか薄情ぢやない」のは手の中で死んでくれるからだ、と、「彼」の歪な感受性を自ら構成してしまう。

4. 「菊戴」と「女中」

犬では無垢さや「出産と育児」(166)が「千花子」を思い出させるが、鳥ではその美しさ、「造化の妙」(161)が彼女に重なる。「黄鵠鴿」(174)まして「菊戴」(159)になされる緻密

(9) 前掲新城によれば、「禽獣」は〈朝方の死〉という小物語を反復する。朝という時間とその明るさは「真夏の白日の眩しさ」に繋がるものと思われる。他方でそれは新城の言う「目覚め」の物語として、「夢」からの絶え間ない覚醒の可能

性も併せ持つ。「稲妻のやうに」、「ひどく驚いて」、「夢にも思はず」といった表現が、心中の場面にそのような両義性を付与している。

を極めた描写は、「ボストン・テリア」を始めとしてどの犬にもなされない。しかし心中未遂の記憶を喚起する媒体であることは、どちらについても同じである。その時「彼は細紐で縛りながら彼女の足の美しさに今更驚いて、/「あいつもこんな綺麗な女と死んだと言はれるだらう。」などと思つた」(179)。また「彼」が「新しい小鳥の来た二三日、わけても「菊戴」に感じるという「この天地のありがたさ」(161)は、彼女が「合掌」するのを見て「虚無のありがたさに打たれた」のに通ずる。「獣」(犬)が「彼」の回想により、「禽」(鳥)が語り手の操作により「千花子」と関連づけられることを原善は指摘している⁽¹⁰⁾が、読み手が「彼」と語り手(地の文の書き手)の水準をないまぜにする結果、「千花子」との心中の瞬間が再現されてゆくのだと言える。

「菊戴」は一方で「番」として登場し、未遂に終わった心中の理想を映し出してゆく。「番」の「まことに美しい寝方」に、「彼」は「人間でも幼い初恋人ならば、こんなきれいな感じに眠つてゐるのが、どこかの国に一組くらゐはみてくれるだらうかと思」う(159)。その「美しさ」、「きれい」さは、「裾をばたばたさせるついでいふから、足をしつかり縛つてね」(179)と、乱れなき姿で死にたがる「千花子」の言葉と響き合う。また「小暗い」以外の理由なく二羽を「神棚に上げ」ることには、「合掌の顔」に囚われた「彼」のさまが見て取れる。この「寝姿」への執着のため、「彼」は二羽の雌のうち一羽を「無惨〔に〕殺し」さえする(163)。その後「菊戴」は「二羽とも」(171、172、173)同じ運命を辿り、最終的に「菊戴夫婦は仲よく死骸となつてゐた」(174)。それは「紅雀」の雌が雄の死後も「長いこと生き」たのと対照的である(174)。

他方で次のような場面は、「彼」が「千花子」との心中を断念した直後として立ち現れると思われる。

「ありがたい、まだ生きてゐる。」と勇み立つと、もう目を閉ぢ、小さい体の底まで冷え切つて、たうてい助かりさうにないものを、手に握つて長火鉢に焙りながら、つぎ足した炭を女中に煽がせた。羽毛から湯気が立つた。小鳥が痙攣的に動いた。身を焼く熱さの驚きだけでも、死と戦ふ力となるかと思つたが、彼は自分の手が火気に堪へられないので、水籠の底に手拭を敷き、その上に小鳥を載せて、火にかざした。手拭が狐色に焦げるくらゐだつた。小鳥は時々弾かれたやうに、ばたりばたりと翼を上げて転げはじめたものの、立つことは出来ず、また目を閉ぢた。羽毛がすっかり乾いた。しかし火から離すと、

(10)『『禽獣』——重層としての〈禽〉/連想としての
〈獣〉』『解釈と鑑賞』1997年4月。

倒れたままで、生きさうには見えなかつた。女中が雲雀を飼ふ家へ行つて、小鳥が弱つた時は、番茶を飲ませて、綿にくるんでやればいいと聞いて来た。彼は脱脂綿に小鳥を包んだのを両手に持ち、番茶をさまさせて、嘴を入れてやつた。小鳥は飲んだ。やがて挿餌に近づけると、頭を伸ばして、啄むやうになつた。

「ああ、生きかへつた。」(172)

「ああ、生きかへつた」と「ああ、死ぬんぢやない」のねじれた呼応に気づいた読み手は、前者の前を後者の後に続けて思い起こすだろう。「彼」が救おうとする対象は引用冒頭で「もの」としてのみ記され、文脈通り「菊戴」ともあえて外れて「千花子」とも解せるようになっている。そしてそのように振り返る時、読み手は「菊戴」が「彼」にとつても当時の「千花子」そのものとしてあつたという想像を免れないだろう。「小鳥の両足を自分の口に入れて温めてや」(173)の場面は、「彼」と「千花子」の触れ合いを読み手に透かし見られることで、官能性を妖しいまでに増幅させることになる。

しかし「彼」は「菊戴」を手を焼く「火気に堪へ」てまで、己の身体を傷つけてまで助けようとはしない。「縮かんだまま硬ばつ」た足指、それを「旦那さまがさつき、お焼きになつたんぢやありませんか」と指摘する「女中」の発言(172)は、「彼」を極めてエゴイスティックな人物と捉え直させる。読み手は「菊戴」と同じく、「千花子」もまた「彼」によって深く損なわれたのでないかと疑い始めるかもしれない。だとすれば「彼」が「菊戴」の「看病」を「怠けがちとな」ること(174)は、「彼」の彼女の生死への半端な関与を戯画化する。あるいはやはり動物だからそう熱心ではなかつたのだと読み手は納得するかもしれない。その際「菊戴」の死は、心中の記憶と向き合う代わりに動物を殺し続けてきた「彼」の欺瞞を照射する。いずれにしても「女中」の批判は、次の会話でさらに鋭い。

「またやつちやつた。火をおこしてくれ。」と、彼は落ちつき払つて、恥かしさうに言ふと、
「旦那さま、でも、死なせておやりになつたらいかがでございます。」

彼はなんだか目が覚めたやうに驚いた。

「だつて、この前のこと思へば、造作なく助かる。」

「助かつたつて、また長いことありませんよ。この前も、足があんな風で、早く死んでし

まへばいいのと思つてをりました。」

「助ければ助かるのに。」

「死なせた方がよろしいですよ。」

「さうかなあ。」と、彼は急に気が遠くなるほど、肉体の衰へを感じると、黙つて二階の書斎へ上り、鳥籠を窓の日差のなかに置いて、菊戴の死んでゆくのを、ただぼんやり眺めてゐた。(175)

「死なせた方がよろしい」という言葉は、「菊戴」を救おうとする「彼」への痛烈な抗議である。それは「彼」が動物の命を半ば弄ぶ度、助力を命じずにいらなかった「女中」の発言であればこそ、繰り返された愛玩－心中全てに対する非難となる。「菊戴」だけでなく「紅雀」や「黄鵪鶉」ほか多くの小鳥が「彼」の元で死んだことを読み手は既に知っている(174-75)。そうした死の反復は「もう小鳥の死骸にもなれてしまつた」と冒頭近くでもちらつかされ、そこにおいて「菊戴」はあらゆる死を束ねるように「あの」で指されていたのだった。「目が覚めたやうに驚く」「彼」は、繰り返された「白日夢」から終に覚醒するだろう。「彼〔が〕急に気が遠くなるほど、肉体の衰へを感じる」のは、心中以降の十年間が「今」という持続から解かれ、不可逆に経過した時として伸し掛かかってきたからと読める。「この菊戴」(173)や「このボストン・テリア」を、「あれ」と「あの千花子」を蘇らせる媒体にし続けてきた「彼」は、「女中」との会話を通じて変容し始めている。

5. 「これ」と「あれ」

読み手が「彼」に以上のような変容の兆しを見出だすことは、まどろみ続ける人物として「彼」を描いてきた読み手、あるいはその解釈自体が変容を迫られるということである。「このボストン・テリアのやうに、千花子は […] のである」という文は、「この」という指示の仕方において「彼」と「千花子」と動物の関係を端的に表している。ところが言説上の遠近は逆で、「千花子」に関する叙述の方が直前に置かれていたのだった。ゆえにこの「この」を読む時、読み手は小説の読み手の位置からいつのまにかずれてゆき、あたかも「彼」自身のような言語意識を身につけている。言い換えれば「彼」を対象化して理解するはずの読み手が、「彼」の意識の運動を自ら構成してゆくのだ。同様に「あれ」や「あの」を介した複数の場面の往還も、

「彼」その人にあり得ただろう記憶の連鎖としてなされる。心中未遂の瞬間から常に逸れてゆきつつも、絶えずそこに引き戻される「彼」の意識の運動を、読み手は小説を読み解く過程で自ずと作り出している。つまりこれらの指示代名詞は、まるで「彼」の言葉であるかのよう
に解釈を紡ぎ出す、その意味で「彼」になることを読み手に求めているのである。

この後「禽獣」は読み手に対し、「女中」の批判を受け流す「彼」の傲慢で残酷な姿をまざまざと見せつける。習慣として繰り返された「木菟」と「百舌」の愛玩は、「今」に持続を回復させる（176-78）。現在の「彼女の踊の墮落に」専ら目を背ける（178）「彼」は、心中当時の美しかった「千花子」になおま囚われていよう。「若い男に化粧をさせ」る彼女の「死顔のやう」な顔（178）から「合掌の顔」を想起した後、「彼」は「亭主の伴奏弾き」に彼女との離婚を打ち明けられる（180）。離婚したのは「去年の暮」、「ドオベルマン」が「雑種」を産んだ「去年の十一月」（165-66）に近い。読み手は「腹を蹴つて、蹴つて、足腰の立たないやうな目にあは」されたこの犬に、「彼」に出産を責められたうえ「荒ん」だ結婚生活を送った「千花子」を重ねることになる。「犬を哀れみながらも、無神経な顔で」買手に相対する「彼」が「ドオベルマン」を引き取ることはなかったと思われるのと同じく、「彼」が今後何らかの形で「千花子」を助けるとも考えにくい。今ここにいる生身の彼女と関係し直すことのできない「彼」が「見つけ」る「甘いもの」は、「生れて初めて化粧したる顔、花嫁の如し」という文句である。「死顔」に「化粧」を施される十六歳の少女の像は、十年前の「千花子」となって現在の彼女を塗り潰す。処女に違いない少女における「死顔」と「花嫁」の連結は、未遂の心中＝結婚を完璧に幻出するだろう。「白日夢〔の〕破れ」が繕われるばかりかさなる「夢」で覆われるこの時、読み手は「彼」の独りよがりによって改めて戦慄せざるを得ない。

「禽獣」の表現と構造はしかし、そうした「彼」の独善性を自ら想像してきたことも読み手に突きつけている。「あれ」の中に沈殿していた「千花子」との心中未遂の記憶は、「女中」との先の会話の後、核心にある「合掌の顔」を初めて「これ」と指示される。「彼」は少なくともその顔にとうとう向き合わされたのである。「彼」が楽屋に赴いたのも「女中」が取り次いだからであり、彼女の批判に応じるように物語は展開してきたと言える。そして「これ＝合掌の顔」は冒頭に送り返されることで、「小鳥の鳴声」と同様に死んでいった動物たちも「彼の白日夢〔を〕破」っていたかもしれないことをほのめかす。「あのまま」と「彼」が突き放す「押入」の「菊戴」は、〈かつて〉に押し込まれていた「千花子」の全ての言動とともに

読み手の脳裏に生々しく、すなわち〈このまま〉刻まれて、それらの「処分」を「女中」に命じる「彼」の無力と横暴に加え、近称と遠称を使い分け、「彼」と「千花子」と動物の関係に読み手を巻き込んできた地の文の書き手の戦略を、鮮やかに照らし出すだろう。その時末尾に引かれる文句は、「彼」の「夢」だけでなく「彼」という「夢」の空しさを読み手に知らしめるものになる。もはや実体の世界において何とも心中することができず、言葉の世界、虚構の世界にその幻を見る「彼」は、地の文の書き手に「彼」という幻を追わされてきた読み手自身のようなものではないか。幻と心中するのでなければ、読み手は自らの解釈を厳しく相対化しなければならない。そうしてラディカルな読み直しへと読み手を導いているのは、地の文とともに台詞（会話）や引用句までも操っている小説全体の書き手である。

「禽獣」は「彼」という空白の主語を持つことにより、その「彼」の思考や認識を読み手に肩代わりさせてゆく。三人称での叙述の効果は、例えば作中人物の経験と離れたところでの意味生成と考察される⁽¹¹⁾が、本稿の分析に従えば事態はむしろ逆であり、読み手は自身の解釈を「彼」の経験として物語世界に差し入れる。ゆえにこそ読み手は読書過程でいくつもの偏った価値観——処女性の賛美、雑種（混血）への蔑視、人間の中でも女性ばかりを動物と重ねて見ること等——を、「彼」という人物のそれとして[再]生産してしまうのだった。しかし「千花子」や「女中」の言葉、小鳥や犬たちの[死]体は、同じく小説を読み解く行為をそれらの陥穽を突くものに変える。なぜなら「彼」になることで、読み手はそれらの響きや重みにほとんど身体ごと晒され、読書における自らの態度を反省させられるからだ。地の文における「彼」の使用は、こうして物語内的な出来事への応答を読み手に選ばせる道を、川端康成という小説の書き手に開いたのではないか。

(11) 渡邊正彦『『禽獣』論——比喻性をめぐって』『立
教大学日本文学』1992年12月。

